

洗心

御遠忌テーマ

親鸞さま、なぜ、お念仏なの？

— 出会おう、語ろう、今ここで! —



トンネル爆発事故

私は田川から1時間くらい入った所の英彦山ひこさんに生まれました。あと二日で71歳になります。

私は説教ができませんので、正直に、親鸞聖人の教えに遇ったことを申しあげて、皆さんお一人お一人の聞法の糧にしたいだけだと思います。

うちの寺の前に、小倉から日田まで抜ける日田英彦山線が通っています、その英彦山駅の先のトンネルを、戦争中は軍が、空襲を避けるために弾薬庫にしていました。

ところが昭和20年に終戦となり、進駐軍がトンネルの弾薬に火をつけたんです。はじめは「花火みたいや」と見ていたら、爆発して、かやぶきの家々が火事になった。さらに1時間ほどしたら、山がドカーンと爆発し大きな石が飛んできて、500戸の家のほとんどは倒壊し、多くの人が石の下敷きになって、147名もが死んでいきました。

父親の決心

私の父親は田川で大谷派の坊さんになっていただけで、そういう事故があつてから、何を思ったのか、その村に入ってい

て、倒れかけた消防ポンプ小屋に住み、回りの人と一緒に生きて行くことを決心しました。

ひどかったですよ。お内陣はなにもなかった。お名号がかつとるだけ。花瓶とかないよ。焼香するのも皿。そんな小さな所でしたが、おばあちゃん達はみな熱心だった。日焼けしてね、真つ黒な顔しとつたけど、涙流してね、「ナンマンダブ、ナンマンダブ…」言うて。

本願の名号

延塚知道先生

(大谷大学名誉教授)

2019年4月13日

何ちゆうかなー、今、僕、わかりません。皆さん、もう、これから先、病氣して死ぬぐらいの、こつちやけどさ、どんなになつても、「人間として生まれてよかったな」と言いたいじゃなく、「私は私でよかつた」と言つてね、自分の人生に手をあわせて死んで行けるような者になる、それが世界の人類の祈りやと思う。お婆ちゃんたちもそんな苦しいつらい状況の中で、親鸞聖

人の教えの中に、そういうものを聴きとつていたと思います。

仏さんに任せよ

メシ食えんでね、1週間も10日も。だから母親はしょっちゅう父親と喧嘩してましたね。「米がない」、「米がないなら、芋かなにかないか」、「そんなものない」、「ほんなら野菜か草かないか」と。母親が「この子どうやって育てる」と言うのと、父親は決まって「いよいよよになつ

たら、仏さんに任せとけばいい」と言つてました。家の前の婆ちゃんは、僕が行くと、いつも「ぼんちゃん、大きくなつたら何になるか」と聞くと、「坊さんになる」と言うたら、「えらいな、えらいな」と頭なでて、カンロ飴1粒くれたんや。お婆ちゃんがそれだけ喜んでくれるのが嬉しかった。私はそんな中で育てられたので、小さいころは幸せでした。

しかし、父親だけは嫌だったね。どうして、こういう生き方をするのかわからなかった。力道山のプロレス見たかったので「テレビ買って」言うたら、「寺は皆さんの頂いたもので生活してる。村の人が全部テレビ買ったら買う」と。何かにつけて、そう言う人でしたから、僕は嫌だった。憎たらしいし、腹たつし。「こんな消防ポンプみたいなのに生んでくれて頼んでないわ」と、何べんも言うた。しかし父親は偉かったよ。「頼まれて生んだんじゃねえ。選んで生めるものなら、おまえみたいにな、ばか、生まんかった」と。くそ憎たらしいでしょう。そういう人でした。

世間の価値観

貧しいのは辛かつたね。高校ぐらいになると世間の価値観が身についた。いくら言うても、消防ポンプは嫌やつたね。金はないよりあつたほうがいい、と。大谷大学だけはいかんことに決めたつたけど、受験に失敗した。そしたら、父親が息子の僕に、頭を畳につけて「どんなに立派な生き方をしたとしても、仏教がわからなかったら、それは自

分の人生にならん。夢のように終わる。他のことはわからんでもいい、仏教だけはわかってくれ。そのために、なんとしてでも大谷大学に行ってくれ」と泣いて頼まれた。結局1年たつてから大谷大学に行くことになりました。

自殺願望

大谷大学に行き仏教の勉強を始めたんですが、聞いた時はわかった気がするんやけど、結局分からん。それに、勉強しても将来食えないものになるということが、どうしても引き受けられなんだ。食えんというのが、からだが震えるくらい怖かった。だんだん頭おかしくなつて、うつ病になりました。将来食えんということは、今死んだほうがましやと。結局アルコールに逃げたりして、体が壊れていきました。胃潰瘍、十二指腸潰瘍、脾臓機能障害。もう、どうしていいかわからない。何度も死ぬと思うんだけど、田舎のおじいちゃん、おばあちゃんが出てくるのよ。母親もよう出てきた。父親も出てきた。何かしらんけど、自分ひとりの命じゃないのかな、と思つたね。

師との出会い

大谷大学は小さい大学だけど、親鸞聖人の世界を身体全体で生きているような先生がおつてね。松原祐善先生、偉かつたですよ。親鸞聖人と法然聖人が40違うけど、僕と先生も40違つていた。当時は携帯なんか無い時代でしたから、電報が来た。「何月何日何時、学長室に來られたし。松原祐善」と。行くと、掌を合せてね、「頼むから、死ななでくれ。生きてくれ。あなたのいのちには、あんた今わからんかもしれないけど、深い仏様の意味が込められているんや。それがわかるまで、死ぬな」と言つて、終わつたら、いつも金くれた。初任給が1万5千円くらいの頃、「これ持つて行きなさい」と3万くれた。さすが飲んだり食つたりするのには使いませんでした。全部、本を買いました。

いのちの呼び声を聞け

体重が40キロきつたこともありました。うつ病もあるから、もうあかんと思うていると、また電報くるんですよ。先生、わかつたと思う。行つた時から顔つきが違つた。真つ赤な顔して「延塚さん、あんた、いとく悪いとかばかり言うて自分の命を殺そうとしてるけど、いいところも悪いところも丸ごとあんた自身じゃないかね。まるごと自分のことを大切にできなかつたら、どうして人のこと大事にできますか」と言つて、先生ボロボロ泣いとつた。

その時、初めて、ずかつと目がこつち側に向いてね、これだけ苦しんできたのは、自分をたてて、いいことは喜んで引き受けるけど、悪いことは引き受けられんというこの根性がおかしののと、初めてわかつた。

先生は掌を合せてね、「南無阿弥陀仏の命に頭を下げて、命のほうから呼びかけてくる声をよく聞きなさい。そのまま生きていけ、と言うとるやろ。良いとこも、悪いところも、どつちも引き受ける、と言うとるやろ」と言つて、先生に泣かれましたね。私はその時、気が狂つたように泣いてました。何ちゆうことをしてきたんやと思つて、何かようわからんけど、自分の命にあやまりました。

生きることも死ぬことも

先生は25年前に84歳で亡くなりました。ガンでした。病院の先生から「手術すれば助かります」と言われたのに、「わかりました。今日から点滴も薬もいりません。生きてるうちに家に帰つて、家で死にます」と言つて、さつさと歩いて帰つた。それから1ヶ月半ぐらいで寝たきりになりました。もう骨と皮だけになってね、それでも嬉しそうな顔をしてましたね。

末期がんは痛いよ。先生、「うー」と言いながら、「ナンダブツ、ナンダブツ」と言うから、「先生、薬じゃないから、痛み止めぐらい、いいでしょう」と、いくら言つても、「痛いのもいただきものであります」と、言うことを聞かない。こんな人がおるのかと、身体が震えるぐらい感動しました。

「いいところも悪いところも、まるごと南無阿弥陀仏のいのちの中にあります。生きることも死ぬことも、南無阿弥陀仏のいのちの中にあります」と、その



して、「仏の教えによつて、死んでいけるような者までに育てられました。ナンダブツ、ナンダブツ」と、自分の命に掌を合わせ、「嬉しかった。有り難かつた言うて、亡くなつていきました。」

聞き書き担当者・感想

最初は大学の先生とお聞きして緊張しておりましたが、私たちに、幼少期からの体験をもとに、戦後の田舎の人たちとの生活を悲しくも力強く共に生きられた父親を、リアルに、面白く伝えて下さり、たいへん身にしみる事ばかりでした。

また、良いとか悪いとか言わないで生きていけと励まして下さつた松原先生の教えに勇気をもたらされ、まさしく生まれ変わりを努力された延塚先生だったなと思ひました。

聞法を続けていく大切さを学びました。

釋尼淨明（松尾由美子）

第16回（6月8日）

「解放への祈り」

兪 漢子先生

（沖繩県・真宗大谷派教師）